

おかえり

特 集

◊生まれ故郷で愛犬たちと暮らす

◆交流から滞在、そして定住へ

- 農家民泊
- 田舎体験・ボランティア
- 田舎暮らし体験施設
- 就業支援・住まい
- 空き家に関する各種事業



生まれ故郷で愛犬たちと暮らす

益田市匹見町三出原集落で、洋犬2匹、柴犬2匹と暮らす豊田良一さん(64)・恵子さん(65)夫婦。同集落出身の良一さんは、高校卒業後、大阪で就職。その後、東京へ居を移し、ビルやマンションといった建物の貯水槽清掃業に携わったのが縁で、独立。一本気で仕事に厳しい良一さんは、顧客からの信頼が厚く、繁忙期には従業員のほか、島根出身の大学生を雇い、大きな仕事を手がけるほどに会社を成長させた。

【都会の生活に疲れて】
帰郷する半年前のことだつた。「仕事を辞めて、匹見に帰る」。良一さんは突然恵子さんにそう告げた。稼ぎは今より随分多かつたが出費も多かつた。取引先の接待や、仕事で厳しく接する従業員へのフォローに食事や酒をご馳走した。また癒しを求めて、犬3匹と猫5匹、大型熱帯魚のアロワナやレッドテールキヤツ

トフィッシュを飼つたが、ペットの飼育費だけでも月15万は下らなかつた。

「東京は朝起きてから寝るまで、何をするにもお金がかかる。稼げば稼ぐほど出でいくところ。そんな暮らしに疲れたらんじやね」。引っ越すなら生まれ故郷の匹見にと、腹をくくつっていた。

「寝耳に水」。困惑したのは、恵子さんだつた。生粋の東京人。「物価も安く、住み慣れた東京は離れがたかった」。が、最終的に長男・慎一さんの後押しで、平成25年6月、匹見へ移住した。



一人ひとりの体調を考えながら食事づくりをする恵子さん

京へ居を移し、ビルやマンションといった建物の貯水槽清掃業に携わったのが縁で、独立。一本気で仕事に厳しい良一さんは、顧客からの信頼が厚く、繁忙期には従業員のほか、島根出身の大学生を雇い、大きな仕事を手がけるほどに会社を成長させた。

【私の親代わり】
30年にわたり飲食店や福祉施設の厨房で働いてきた恵子さんは、「益田市立匹見高齢者生活福祉センターふれあいの園」で利用者の食事を作つてゐる。

過去の経験から、「食べられるうちには健康な証拠」と、美味しく食べてもらえるよう、一人ひとりの好き嫌いや毎日の体調を確認し、

そんな恵子さんの思いが通じてか、「美味しかった」「次も楽しみにしているよ」と声がかかると何よりも嬉しいと言う。

一人ひとりの体調を考えながら食事づくりをする恵子さん



愛犬とともに、豊田良一さん(右)と恵子さん

30年にわたり飲食店や福祉施設の厨房で働いてきた恵子さんは、「益田市立匹見高齢者生活福祉センターふれあいの園」で利用者の食事を作つてゐる。

過去の経験から、「食べられるうちには健康な証拠」と、美味しく食べてもらえるよう、一人ひとりの好き嫌いや毎日の体調を確認し、

実は恵子さん、両親を早く亡くしている。「利用者の方たちは私の親代わり」と言つてはばかりない。「いつまでも元気でいてほしい」。そう願つている。

【よう帰つてきたね】

「匹見峠温泉やすらぎの湯」に勤務する良一さんは、ベッドメイキング、ボイラーの炊き上げといった施設管理に加え、窓ガラスの清掃や雨漏りの補修などの仕事をきけばきとこなしている。

温泉を訪れた地元客から、「良ちゃん、よう帰つてきたね」と温かい声をかけてもらうのが何より嬉しいという。「今では主人は匹見弁をしやべり、だんだん田舎（匹見）の人になつているんですよ」。そう、恵子さんは話す。

【驚きの連続】

移住から間もなく2年を迎える。良一さんは、移住前に会社を慎重に譲った。今でも馴染みの客から指名を受けて出張するが、「東京の暮らしが全く恋しくない

少しずつ、ゆつたりと ひきみ時間を刻んで

よ」と、きつぱり。「収入はかなり減つたけど、贅沢しなければ生

活していく。お金では買えないものが匹見にはあるからね」。

自身を「回遊魚のように、じつとしていたらない性分」と例えるように、休日は家中を徹底的に掃除したり、独学で覚えた野菜作りに精を出す。「畑仕事は未経験だったけど、キヤベツやカボチャ、ナス、ウコン…と、食べきれない量の野菜ができる、近所の人におすそ分けしたよ」。土と親しむ暮らしが板についてきた。

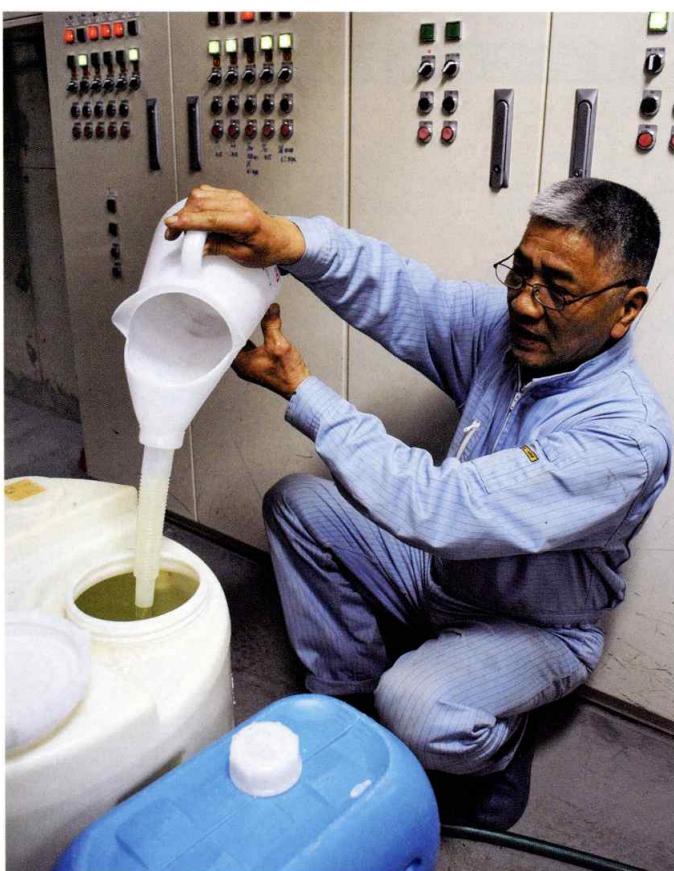
一方、恵子さんにとって、匹見の暮らしが驚きの連続だった。厳寒の冬。街灯はわずか。夜は真っ暗で、不夜城の東京とは正反対だ。出会う人も少ない。ふらりとコーヒー店やファーストフード店、回転寿司に通っていたころが懐かしい。タヌキ、サル、キツネ、クマ…。都会なら動物園にいる生き物

に、道端でばつたり出会うこともあり少なくない。

「サルがカボチャを小脇に抱えて歩いていたり、石の上に腰かけてプチトマトを食べたりする姿に出くわしたんですよ」。恵子さんは、そのときの様子を興奮気味に話してくれた。

恵子さんは年に数回、孫に会いに東京へ帰る。近所や利用者の方に、しばらく匹見を離れることを話すと、「ゆっくり休んでおいで。でも匹見に帰つてきんさいよ」と声をかけてもらう。

本人も気づかぬうちに、地域の人々との心の距離が縮まっている。



ボイラー室で作業をする良一さん

